Osaka University Knowledge Archive

Title	現代日本語文法の輪郭
Author(s)	南, 不二男
Citation	大阪大学, 1995, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39686
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【7】

氏　　名	南（みなみ）　不二男（ふじお）
博士の専攻分野の名称	博　士（文学）
学位記番号	第　12134　号
学位授与年月日	平成7年10月26日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	現代日本語文法の輪郭
論文審査委員	(主査) 助教授　仁田　義雄 (副査) 教　授　J.V.ネウストプニー　　教　授　真田　信治

論文内容の要旨

本論文は，現代日本語の文構造を，論者がかねてから主張してきた階層的構造観によって分析，記述したものである。

内容は，第1部「構造の輪郭」(「述語文の輪郭」「独立語文の輪郭」「従属句の構造と種類」「名詞句の構造と種類」の諸章から成る）と第2部「構造の諸相」(「描叙段階を中心として」「判断段階を中心として」「提出段階から表出段階へ」の諸章から成る）とに分かれ，その前後に「序章－いくつかの前提－」「終章－階層の意味－」が置かれている。

「序章」では，研究の目的と対象，用例を収集した資料，研究の基本的方向についての前提，分析・記述の仕方，記述に使用する術語類（学校文法用語を中心とする）が概括的に述べられている。

本論文で論者が取る基本的立場は，文の構造を複数の段階（階層）から成るものとして把握しようとするものである。これは，言語表現の背後には，その表現の実現のための，また，その表現から内容を把握する（理解する）ための，さまざまな情報の処理があり，その処理にはいくつかの段階が認められる，という考え方に基づいている。その段階として，本論文では，次の4つのものが区別されている。

描叙段階－言語表現の内容として取り上げられるものごと自体，その働き，状態，属性などについての情報が処理される段階である。

判断段階－描叙段階で処理された内容のさまざまな面についての認定（肯定・否定その他),空間，時間に関する限定，各種の強調などにかかわる情報処理の段階。

提出段階－描叙，判断の両段階の処理を経過してきた内容に対する言語主体の態度に関する情報が問題となる段階（たとえば，断定，意志，疑いなど。また，主題となるものごとの提示)。

表出段階－実際のコミュニケーション行動そのものや，そのコミュニケーションへの参加者との関係が問題となる段階（たとえば，受け手への働きかけ，外界の事態に対する対応など)。

第1部は，このような粋組によって文構造の輪郭を描こうとしたものである。まず最初に，「述語文の輪郭」の章では，述語文（述部を必須成分とする文）を「述部の構造」と「述部と述部以外の諸成分」とに分けて，これまでの何人かの研究者による分析を紹介している。ここで取り上げられた研究は，述部の構造については，金田一春彦，渡辺実，芳賀綏，

服部四郎，林四郎のもの，述部と述部以外の諸成分との関係については，山田孝雄，三上章，阪倉篤義（論者の初期の提案とほぼ同時期）北原保雄（論者以後）および論者自身のものである。そして，それらがいずれも文の構造における階層的性格を指摘するものであることを示している。

これらの研究者の多くが分析の主な手掛かりとしたのは，文構造中の要素や成分の現れ方（とくにその順序），およびそれと対応する内容・意味の面における違いである。それに対して，論者がもっぱら分析の最初の手掛かりとしたのは，各種の従属句（たとえば，～ナガラ，～バ，～ケレドなどで終わる句）の構造中の要素，成分の共起関係である（論者以外の研究者の中では，三上章が従属句の問題にも言及している）。その共起関係の違いによって各種従属句は３種に分けられるが，それらはそれぞれ前述の描叙，判断，提出の３段階に対応する。論者は，そのほかに従属句としては現れえない構造（受け手に対する働きかけの性格〈命令その他〉を含むレベル）を考えた。それが表出段階に当たるものである。

論者は，このような構造上の階層性が名詞句にも認められると考えた。それを述べたのが「名詞句の構造と種類」であり，また，「独立語文の輪郭」の主要な部分も，この問題に関係している。

従属句の構造中の要素や成分の共起関係，それに基づく従属句の分類は，もともとはいくらかの実例と，現代日本語の話し手である論者の内省によって考えられたものである。さらに多くの実例を計量的に調査することによって，それを検討しようとしたのが「従属句の構造と種類」の中の第４節「成分，要素の現れの実態」である。そこでは，ほぼ仮説を支持する結果が得られたが，部分的に修正が必要な事実の発見をも指摘している。

第２部「構造の諸相」は，第１部で述べた構造上の４つの段階の区別に対応させ，それぞれの内容・意味の面についての考察を展開している。第1部で分析の重点が置かれたのは，どちらかというと，構造中の要素・成分間のsyntagmaticな関係であった。それに対して，第２部では，構造に現れる要素や成分のparadigmaticな関係（対立関係）により多くの注意が払われている。

第２部の最初の章「描叙段階を中心として」は，このレベルで問題になる構造の意味上の一般的性格が，他の３段階のそれと比べて最も非限定的なものであることを述べ，さらにいくつかの側面を「格構造」「関与者構造」および「修飾構造」に分けて，それぞれの意味上の性格を論じている。このうち，格構造は伝統文法でいう格（case）の表現に関わり，関与者構造は，授受表現，敬譲表現，使役・受身の表現に関係し，修飾構造は，状態副詞その他の語が中心となる表現である。

引き続き，「判断段階を中心として」の章では，この段階において内容の限定の程度が描叙段階よりも一段と進むという一般的特徴を述べたあと，「認定構造」「背景構造」「とりたて構造」の３つの側面を区別して，それぞれの意味上の性格を論じている。認定構造は，肯定・否定の区別，個別・総称の区別のほか，伝統文法における時制（tense）の表現の多くの場合に関係がある。背景構造は，空間や時間の限定，認定の根拠，情報源，原因・理由，各種条件その他の表現と関わる。とりたて構造は，たとえば対比的な強調など，認定構造との関係において問題になる各種の強調表現と関わるものである。

「提出段階から表出段階へ」の章で取り上げられる２つの段階は，いずれも言語主体（話し手，聞き手）に直接関わる性格を有する。このうち，提出段階は，一般的にいって，その文で表現される内容に対する言語主体の態度の表現と関係する。論者は，それをさらに「意向構造」と「提示構造」とに分けてその内容を分析している。前者は叙述の仕方，意志，推量の表現などに関わる。後者で主に問題となるのは，主題の提示である。表出段階の一般的な性格は，言葉の外の世界，とくに送り手（話し手）と受け手（聞き手）との関係に密接な関係がある，ということである。そこで，まず受け手の存在を前提としない表現，受け手の存在を前提とする表現を区別し，後者については，さらにいくつかの種類に分かれるとしている。

「終章－階層の意味－」では，４つの段階それぞれの性格を述べたあと，これらの段階が認められる情報処理の過程が，内容・意味から言葉の形への，いわば混沌から分節体への過程であること，また，それら段階について知ることが出来る知識は，その時その時の観点によって限定された相対的性格のものであることを述べている。最後に，構造の階層性は，日本語だけでなく，人間の言語一般に認められる可能性があることを指摘している。

参考論文『現代日本語文法試論』は，1961年以来，論者が，現代日本語の文法とくにシンタクスの分野に関して発表してきた論文を集めたものである。

これらには，本論文で論者が述べている文構造についての考え方（階層的構造観）の形成の過程を示すものがいくつか含まれている。

文の諸成分を，連体修飾語中に現れうるものと現れえないものとに区別し，それによって文構造に2つの段階が認められるとすることにより，その後の4段階による階層的構造の認識の萌芽をなした「文論の分析についての一つの試み」，各種従属句について，その構造上の特徴から3種に区別できるという仮説を提案した「複文」，主として上記従属句の構造分析に基づき，文構造に客観的な事態の表現から言語主体の情意的な面の表現に至るまでの4つの段階が認められることを述べた「述語文の構造」，構造上の4つの段階の区別が，名詞句にも認められることを指摘した「名詞的表現の構造」，文構造に認められるとした4つの段階それぞれの意味上の性格を考察した「文の意味についての二，三のおぼえがき」，常識的な意味で主語とされるさまざまな表現の文法的性格を，階層的な見方から検討した「主語の周辺」，以上がそれである。

上で触れたもの以外の諸論文は，本論文『現代日本語文法の輪郭』で論者が取り上げなかった問題に関する研究で，本論文の記述を補うものということができる。すなわち，「質問文の構造」，「語彙の意味」，「現代敬語の意味構造」，「一つの言語モデル－仮説と疑問－」，「言語表現における『空間的構造』と『時間的構造』」，「理解のモデルについてのおぼえがき」が，それである。

論文審査の結果の要旨

本論文は，『現代日本語の構造』（1974）などを中心に，論者が30年以上にわたって続けてきた研究の総決算であり，そのエッセンスである。論者のこの階層的文構造観は，長く日本語の文法研究に生産的な影響を与えつづけ，日本語の文法研究，特に現代日本語の文構造の研究をリードしてきた射程の大きいものである。

本論文の優れた点はいくつもあるが，まず，方法論に関することが上げられる。本論文は，単に日本語の文法事実を分析・記述するというのではなく，あるモデルを導入して，統一的・体系的に文法事実を分折・記述しようとしたものである。しかも，本論文に展開されるモデルは，文構造全体に対する実効的な分析・記述のモデル構築といった点では，戦後初めての本格的なものである。さらに，論者は，モデルそのものについて反省的な姿勢を有している。モデルといったものを過信するのではなく，それによって得られる情報・成果は研究者の取っている観点によって限定される，といった自覚のもとに研究を行っている。

モデルそのものについていえば，その分析・記述の対象領域の広さが上げられる。本論文が提出する階層モデルが分析・記述の対象とするのは，あるいは対象にできるのは，格や副詞的修飾成分およびテンスやモダリティといった文構造（文の構成要素）の一部ではなく，日本語の文の全体的構造そのものである。さらに言えば，日本語の文だけでなく，さまざまな言語の文構造の分析・記述に適用可能なものである。事実，Foley and Van Valin “Functional Syntax and Universal Grammar”（1984）は，論者の階層モデルと近似したモデルで分析を行っている。また，論者のこのモデルは，階層を，言語表現の背後に存する，表現実現のための，また，表現から内容把握のための情報処理の段階の反映として捉えることによって，文構造だけでなく，言語の表現・理解の構造の巨視的説明への貢献をも可能にするものである。

論者の階層モデルによって明らかにされた文法事実は少なくない。その中でも，従属句の分析・記述は，日本語文法研究に新しい一頁を拓いたものである。従属句の内部に存在しうる成分や従属句の述部構成要素として出現しうる要素の実態，さらに従属句相互の包み包み込まれのあり方などによって，従属句を3種（文を入れると4種）に分類してみせる。統語的証左を豊富に差し出しながら，統語的な地位の違う従属句のタイプを見事に抽出・類別している。論者の従属句に対する研究の優れたことは，明治以来の記念碑的著作を集めた『日本の言語学・文法I』（1978）に，階層モ

デルによる従属句に対する研究を含んだ論者の論文「述語文の構造」が収録されていることからも知られよう。また，階層モデルを適応した名詞句の分析・記述も，モデルの適応範囲の広さを示すとともに，立ち遅れている名詞句に対する分析・記述への貢献として貴重なものである。さらに，名詞句への考察と密接につながる独立語文の考察も，従来のものを一歩も二歩も進めたものとして注目される。

文法研究史の中に論者の仕事を位置づければ，次のようなことが指摘できよう。これまでの研究の成果を的確に受け継ぎながら，従来の研究では残され手薄であった領域に対する実効性のある分析・記述の新しいモデルを提出した。さらに，そのモデルは，日本語だけでなく，通言語性を持った適用範囲の広いものである。論者以前の日本語文法研究の主流の一つに，山田をはじめ，渡辺や金田一，芳賀などに見られる，いわゆる「陳述論」という名で呼ばれる文成立論的研究がある。これは，主に述語成分の構造の分析・記述に力点を置いたものである。その意味で，従来の日本語文法研究においては，詳しい文の内部構造論は不在であったといってよい。論者の本研究は，従来の文成立論的研究が明らかにしたところ，長所を受け継ぎながら，文の内部構造についての生産的・実効性のある分析・記述の方法論と，その方法論による分析・記述を呈示してみせたものである。

論者は，階層モデルによって，現代日本語文の内部構造の分析・記述を前進させたが，さらに，それ以上に，日本語シンタクスの領域において研究する研究者にとって，利用可能なモデルを提供した。後進が利用可能であるということは，論者の階層モデルが，決して思弁的なものではなく，実証性を備え，明示的に規定されたものであることを示している。論者の階層モデルは，もはや学界の共有財産である。現在も，日本語シンタクス（日本語だけに限らない）の領域で研究する研究者の多くが，論者の階層モデルから，直接間接の影響・刺激を受け，自らの研究を推進させている。沢田治美『視点と主観性－日英語助動詞の分析－』（1993）なども，その具体的な一つの現れである。

以上，本論文『現代日本語文法の輪郭』は，階層構造の観点からの分折・記述が日本語の文構造の分析・記述にとって極めて有効であることを実証し，また，この観点が，言語の表現・理解の構造の巨視的説明にとっても有用であることを示している。

ただ，本論文には，分析・記述において，その詳しさが一様でないところが存する。十分論が展開され，詳細に分析・記述が行われているところも多いが，未だ問題提起に止どまっている感のするところもある。ただ，こういったことも，現代日本語文法全体に対する一貫性のある方法による分析・記述を目指す研究としては，避けがたい宿命的なものである。文法全体の分析・記述など，当然一人の人間のよくなしうることではない。

しかし，上述のような点は，本論文全体の価値を損なうものではない。本論文に集約された論者の文構造に対する考え方が，1960年代後半から現在にいたるまで，日本語文法研究の進展に果たし続けた役割・影響の大きさには，計り知れないものがある。本審査委員会は，本論文を博士（文学）の学位に十分ふさわしい価値を有するものと認定する。